

王こそが担うことになった。

しかしここには本来、超俗的で聖なる内面精神的存在であるはずの教会が、やがて内面的超俗世界を支配するにとどまらず、かえって外面的世俗世界（自然世界+人間世界）をも支配するという自己矛盾を生むに至る。そしてこの自己矛盾こそ、次第に教会自身の神聖性、超俗性を衰弱させ、本来内面権威的にこそ支配しうるはずの人間の内面精神世界を外権威的に支配するという抑圧を引き起こすことになった。またその結果、ルター、カルバンらの宗教改革を呼んで自壊の道を歩むことになる。かくて「神中心主義」は潰え、次の「人間中心主義」を生み出すことになったのである¹¹。

近代西欧における「人間中心主義」はこうした経緯から誕生したが、それはとりわけ近代西欧科学の中に色濃く現れることになった。もともと中世における「(唯一) 神中心主義」は「(唯一) 神こそがすべての被造物（現存世界=自然世界+人間世界）を人間に奉仕すべく創造した」とする観念をともなっていたが、「人間中心主義」はこの観念のなかから神を除去し、これにかえて人間を優越視して被造物（現存世界）の中心に、すなわち「神の座」に据えることによって成立した。この時人間世界が現存世界から抽出され、神の座に就くのである。つまり「中世から(唯一) 神の超越性を除去すれば近代が現れる」というわけである¹²。

(4) 「科学実験」の目的

このようにして登場した「人間中心主義」は、近代西欧科学の根底を支えるものとなった。それは現存世界の中から、人間世界を自然世界と区別し抽出した上で、人間が自然世界を支配するいわば「神の座」に就く要求として現れる。この時、科学の対象（客体）としての自然世界と、科学の主体としての人間が明確に分裂することになる¹³。この主客の分裂のゆえに、近代西欧科学の

科学実験の目的は自然世界に対する単なる認識=観察（ウォッチング）自体に置いて、自然世界の模倣を試みるものではなくなった。

すなわち科学実験の目的は、自然世界の認識、模倣というレベルを越えて、科学の対象となった自然世界を、「神の座」に就いた人間の計算（目的論的価値判断）によって組み立て直すこと、再構成し直すことにこそ置かれるようになったのである。科学実験における自然界の認識=観察やその模倣は、それ自体に目的があるのではない。あくまで科学実験を通じて自然界の再構成のための設計図を描くのに必要となる情報・資料を提供する点にこそ目的があるのである。

実験室が外部の生なまな自然世界自体の時間・空間と区別された人為的な内部の時空を形成し、それゆえにまた外部の自然界から隔離された「密室性」を特徴とするようになったのもこのゆえだった。

こうした密室的な実験室の問題としては、差し当たり次の二点を指摘し得る。

第一の問題としては、実験室の中では自然界の一部を切り取ってこれに人為的な再構成を加えるため、本来自然界では生じ得ない変化変形も起きる可能性を持つ点を上げ得る。そのような変化変形が外部自然界の生態系循環にとって好ましいものかどうか、生態系循環を崩す危険性については、何ら保障がなく、この点では実験者の主観的な倫理のいかんに一方的に依拠するほかはない。

第二の問題として、実験者の人為的な再構成により変化変形させられた自然の一部が、実験者である人間に反作用による影響を及ぼすことがないよう、実験室は厳格な統御によるシールド（shield 防御の隔離壁）を設けているという点にある。ここでは実験者である人間と実験対象としての自然の関係は、実験者から対象への一方向的な（unilateral）再構成の働きに限定されており、現存世界で通常起きる双方向的（bilateral）相互作用（人間と自然の対話）の関係は働かないように統御される。

以上の近代西欧科学のあり方は、18世紀から19世紀にかけての産業革命を経過して、自然界の人為的再構成によって生まれる一連の近代産業技術を生み出した。そしてやがて近代西欧科学と近代産業技術は不可分一体のものに見なされ、「科学技術」と総称されるようになったのである。

中岡哲郎はその著『工場の哲学』の中で、1960年代を境に登場した整然たる生産ラインを備えた精密でかつ大規模な機械工場を、実質的に科学の実験室がその規模を巨大化して工場化したものと述べている¹⁴。事実、こうした精密な大型機械工場では、科学実験室と寸分変わらぬ条件下で、日常の生活空間、自然空間には決して存在しない無菌、無塵の空間を工場内に保つために、従業員の操業上の手順（人為）が厳格に規定されているのである。

(5) 人文・社会科学と「人間世界」

このように自然世界を人間の目的論的価値判断に沿って人為的に再構成する近代科学技術の傾向は、まず自然科学において典型的に現れたが、自然科学のあとを追って成立した社会科学、人文科学も当然同様の方向を目指すことになった。

人文・社会科学の対象は、自然科学の場合と異なって人間世界にほかならない。近代自然科学の本質が現存世界の中から、自然と人間とを区別し人間を優越化させて「神の座」に就けた上で、人間が自然を支配する要求として登場したとすれば、近代人文・社会科学は人間の自己認識の要求、つまりまず人間みずからが人間世界を科学の対象として認識し、その上で人間世界を人為的に再構成しようとする要求として登場したと言える。

ただ留意を必要とする点は、元来自然科学にあっても、人間の生理的身体が自然世界の一部として科学的対象として扱われ、それゆえ人為的再構成の対象ともなってきたという点である。

これと同様に近代人文・社会科学においても、人間世界（人文的、社会的事象）を人間の生理的

身体と同様のもの、すなわち自然世界と同等に見なして科学の対象として扱うのである。そうすることで、人間世界を人為的再構成の対象に変えようとする点にこそ近代人文・社会科学の特徴があるわけである。

問題は人文・社会科学が対象とする人間世界はいかに方法的に自然世界と同様に扱われようとも、原理的には自然世界や生理的身体とは異質な世界だという点にある。この点は人間世界が自然世界に比して、目的追求的な意志によって作り出され、生み出されるという特質を相対的に抱えている点に起因している。すなわち人間世界自体が現実（sein）を当為（sollen）に沿って変えようとする目的追求的な人間行為によって形成されているという点が、自然世界と相対的な違いを作り出すのである¹⁵。

しかしながら人文・社会科学は自己を科学足り得るものとしようとして自然科学を純正な科学としてモデル視する限り、この人間世界の目的意志的、当為追求的な特質を、相対的に軽く見る傾向を免れなくなる。つまり科学研究の主体としての研究者には、科学の対象となった人間世界を操作し再構成しようとする目的論的価値判断を許しながら、対象としての人間世界自体が示す目的追求意志については相対的に軽く見るという傾向である。この点についてはここでは詳述を避け、また後段で触れることとする。

(6) 近代科学の陥穽：「対話」性の欠如

以上見てきたように、科学研究の歴史は自然科学であれ、人文・社会科学であれ、いずれの時代にも研究に目的論的価値判断が切り離しがたく内在した。すなわち歴史は、古代から中世そして近代へと時代が移るにつれ、研究上の目的論が「自然中心主義」から「神中心主義」へ、そして「人間中心主義」へと移行したこと、言い換えれば「世俗世界のために」から「神の国のために」そして「人間のために」へと移行し、それによって最終